

St. Luke's International University Repository

“Patient”ではなく“People”を臨床の看護ケアの
中心に 一病院・臨床実践でのPCC－：
さまざまな場所に求められるPeople-Centered
Nursing Care

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高井, 今日子, Takai, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015286

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



“Patient”ではなく“People”を臨床の看護ケアの中心に

——病院・臨床実践での PCC——

高井 今日子

I. Nursing Professional Practice Model（専門的看護実践モデル）の開発

聖路加国際病院・看護部では2014年、People-Centered Care（以下、PCC）を中心とした専門的看護実践モデル（Nursing Professional Practice Model）を開発した。専門的看護実践モデルとは、組織の看護ケアを牽引していくためのよりどころとなる理論・現象・システムを図式的に記述したものである。モデルは当院・看護部の理念・目標、そして日ごろの臨床実践で重要と考える要素を抽出し開発された。事前に調べた他施設のモデルにおいて、看護ケアの対象として多く用いられていたのは“Patient”つまり“患者”であり、病院という限られた場での対象をイメージさせるものであった。

予防医療センターや訪問看護ステーションなどを有し、疾患をもたない対象や病院といった施設内以外の場においても看護ケアの提供をしている当院の看護の対象は“Patient”だけではないこと、さらには臨床の場においても病院という場以外での対象の生活を考えた看護の提供を目指すべきであるという考えから“People”を看護の対象としている PCC を筆者たちのモデルの中心的概念としておくこととした。そして、看護管理、臨床実践、継続教育など院内のさまざまな場でこのモデルをよりどころに PCC の実践を目指した活動が始まった。

II. 病院における PCC の実践

1. 看護管理の側面から

モデル開発後、PCC の視点から入院時の看護記録の改訂を行った。医療安全・診療報酬・JCI (Joint Commission International) 認証など、さまざまな質管理の観点から入院時、看護師が行うスクリーニング、アセスメント、看護計画立案のために残すべき記録は増加し、電子カルテ内のテンプレートは漫然と増やされてきた。その形式は効率化を重視したチェックリストのようになり、最終的な看護問題は疾患や治療が中心で対象の生活や価値観がみえない状況になっていた。そこで当院の看護記録検討会では、医療者でなく対象となる“People”の価値観や

生活を重視した看護実践に直結する情報を記録に残すために【初診時記録看護】のテンプレートの改訂を試みた。

対象のもつ価値観や日常生活の視点から看護実践を導き出すためのポイントを重視し、最初に記述する内容は入院時に対象が“困っていること”とした。患者の言葉で“困っていること”を記述、入院や治療によって対象がもつ問題とその解決のためのニーズを理解し、入院生活や退院後の生活をその人らしくすごすことをサポートする看護計画の立案を導くための情報収集ができるテンプレートを開発した。

2. 臨床実践の場面から

臨床実践では、自分たちの看護実践がこのモデルをよりどころとしていることをすべての部署で再考するという作業を行った。業務改善やマニュアル作成、他職種との協働、部署での勉強会や研究など日々の活動が、PCC を実践するために掲げた“質・安全”“QOL/自律尊重”“多職種アプローチ”“専門性”を目指すものであることを、モデルを用いて確認していった。この作業は管理者ではなく部署のスタッフナースによって行われ、成果物としてポスターを作成、それをもって看護部内では発表会を、院内では展示会を行い、組織における PCC の浸透につなげた。

その後も PCC は多くの部署で実践され、院内外で報告されている。たとえば、がん患者の継続看護を目指した入院病棟と外来部門の連携活動のための工夫や、在宅で人工呼吸器を装着し退院することが決定した患者と共に、帰宅後の災害時を想定した避難訓練の退院指導への取り組みなど、病院全体のシステムの変更から個々の対象への看護まで PCC の実践を目指した活動が行われている。

III. 今後の展望

「“患者”ではなく“市民”と看護を」とし、PCC を目指すことで当院の看護は少しずつ成長している。今年度からは対象の生活の場、地域と協働を推進するための活動を行っている。院外の看護職・介護職との連携の充実を目指し、中央区の保健師やケアマネジャーと共に地域の看護連携を考えるための会議を開催した。これは、新

たな当院の役割を考えることができる機会となっている。
今後、1人ひとりの看護師がPCCの理解を深め、モデルを活用した看護実践を行っていくことで、看護の質は

向上し“People”とともに実践していく看護が育まれる
と考える。